「宇宙」の語源と語義の変遷-古代中国語と近代科学用語の接点-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学日本文学研究会 公開日: 2013-11-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金木, 利憲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16208

【研究ノート】

「宇宙」の語源と語義の変遷

――古代中国語と近代科学用語の接点

金木利憲

はじめに

日本において愛読されている漢文作品の一つに、中唐の文人官僚、白居易の「長恨歌」がある。玄宗と楊貴妃のラブロマンスを語るこの作品は「漢皇重色思傾国、御宇多年求不得」（漢皇色を重んじて傾国を思ふ、御宇（あめのしたしろしめす）こと多年、求むれども得たまはず）と始まる。

御宇、の字は、現在「ぎょ・う」と単に音読みされることが多いが、鎌倉時代の古写本（金澤文庫本：注一）を繙くと、この二字に「アメノシタシロシメス」という訓が振られている。「御」は統御・御者などという語がある様に、ものごとが望む方向に進むように先導するという意味があり（注二）、「宇」は第二章で述べるようにこの世という意味がある。併せれば「この世を望む方向に進むように導いていく」つまり天下を統治するという意味となろう。

現在、宇宙開発が花盛りである。だが、何気なく使っている「宇宙」という言葉は、優に二千三百年を超える歴史をもつことは意外と知られていない。

「宇宙」という語の起源は、春秋戦国時代以前の古代中国にある。それが日本に伝わったのは、漢字伝来と同時であるという伝説がある。『古事記』・『日本書紀』によれば、日本に漢字を伝えた和邇（わに）吉師（王仁とも）は、『論語』・『千字文（せんじもん）』を携えてきたというが（注三）、『千字文』は、

天地玄黄、宇宙洪広

書き下し：天地のあめつちは、玄黄としてくろくきなり、宇宙のおほそらは、洪広としておほいにひろきなり。

通　釈：天地は黒く黄色い。宇宙は大きく広い。

から始まるのである。

他の言葉がそうであるように、「宇宙」という語もまた、古代から現在まで使われるうちに、意味は変化、あるいは多義化してしまっている。この研究ノートでは、

①「宇宙」という言葉の起源
②古代中国における用例と意味
③上古から現代までの日本における用例と意味の変遷
④近現代の英和辞典を基にした、訳語としての「宇宙」の様相
⑤日本において「宇宙」の意味が現代的なものに変化した時期

以上五点について考察していくことにする。

なお、本論はその性質上、多数の引用および書き下し・語釈がある。煩をさけるため、それらの出典については、特に明記したもの以外は末尾の参考文献一覧に挙げたので、適宜参照されたい。

（注一）白氏研究においては、中国から将来されたオリジナルテキストの編成と本文を残すテキスト群を「旧鈔本系」、宋代に成立した木版本の系統に属するテキスト群を「刊本系」と区分する。金澤文庫本は、旧鈔本系テキストの中でも現存巻数が多くかつ成立が古いことから、特に重視されるテキストの一本である。なお、金澤文庫本では「寓」となっているが、説文によれば宇と寓は異体字との扱いなので、問題はないと考える。

（注二）『説文解字』によれば、「御は使馬也」としている。「馬を使役する、操る」の意であろう。

（注三）和邇の渡来は、『日本書紀』によれば応神天皇二六年（二八五年）であるが、『千字文』は、南朝・梁の武帝（位：五〇二～五四九年）の命により編纂されたものである。和邇将来『千字文』が、現在我々の知っているそれと同一だとするならば、矛盾が生じてしまう。この点については緒論あるようである。しかしながら、光明皇后の正倉院への寄進目録である「国家珍宝帳」（七五一年）には「搨晋右将軍羲之書巻第五十一眞草千字文」があり、国宝の「眞草千字文」がそれだと推定されている。よって、遅くとも奈良時代には将来されていたと言えるだろう。

一．辞書的定義

まずは、「宇宙」という言葉が現代日本の国語辞典でどのように定義されているかを記す。『日本国語大辞典』（第二版）では以下の通りである（用例省略）。

う-ちゅう　…ウ【宇宙】〔名〕

（「淮南子-斉俗訓」に「往古来今謂之宙、四方上下謂之宇」とあり、「宇」は空間の広がり、「宙」は時間の広がりをいう）

①あらゆる事物を包括する広大な空間。天と地の間。天地と天空。また、おおぞら。一般的には、広狭さまざまに用いられ、限られた世界、天下などを指す場合もある。

②哲学的には、秩序ある統一体と考えられる世界全体、物理学的には、物質と輻射エネルギーが存在する限りの空間、天文学的には、全ての天体を含む空間。また、一般に大気圏外の空間。

今日において、我々がまず思い浮かべるのは、①の中でも特に「全ての天体を含む空間」、「大気圏外の空間」の意味ではないかと思う。宇宙開発、宇宙飛行士、宇宙探査、宇宙人、みなこの意であろう。

二、「宇宙」という語の起源と中国古典における意味

「宇宙」という熟語が文献に現れるのは中国の春秋戦国時代のことである。管見の限り、最も早い例は、恐らく『荘子』（紀元前四～三世紀頃成立）である。内篇の斉物論篇、外篇の知北遊篇などに現れる。また『淮南子』天文訓・斉俗訓、『荀子』解蔽篇、『呂氏春秋』孟春紀の本生などにも例がある。『史記』・『漢書』にも使われている。

以下、『荘子』・『淮南子』・『荀子』・『呂氏春秋』を例にとり、それぞれの「宇宙」の意味を探ってみた後、古辞書『説文解字』（段玉裁注）、を示したい。

まずは『荘子』からである。一〇例以上あるが、ここでは斉物論篇・知北遊篇を取り上げる。

斉物論篇

旁日月、挾宇宙……

書き下し：日月に旁び、宇宙を挾み……

現代語訳：（聖人の輝きは）日月と並び、（聖人の包容力は）宇宙を小脇に抱えるかのように……

ここでの「宇宙」はこの世界のことである。聖人は世界を包み込むほど大きな包容力を持っていることを形容している。

知北遊篇

道無問、問無応。無問問之、是問窮也。無応応之是、無内也。以無内待問窮、若是者、外不観乎宇宙、内不知乎大初。

書き下し：道は問ふことなく、問ふも応ふることなし。問ふことなきに之を問へば、是れ窮を問ふなり。応ふることなきに之に応ふるは、是れ内なきなり。内なきを以て窮を問ふを待つ、是くの若き者は、外は宇宙を観ず、内は大初を知らず。

通釈：道は問えるようなものではなく、問うてもまた答

えられるようなものではない。問えないものを問うならば、これはないものを問うということである。答えられないことに答えるなら、これは中身がないことである。中身がないのに問うことも答えることも出来ないことに応じるものがいるが、これは、外は宇宙、内は大初を知らないのである。

ここでの「宇宙」は「大初」の反対概念として現れる。大初とはこの世の初め。これを内側とするのだから、宇宙は出来上がったこの世、これが外側である。

次に、『淮南子』天文訓・斉俗訓を見てみたい。

天文訓

太始于虚霩、虚霩生宇宙、宇宙生気、気有涯垠……

書き下し：太始は虚霩、虚霩、宇宙を生じ、宇宙、気を生ず。気に涯垠有り……

通　　釈：はじめは無であった。無から宇宙が生まれ、宇宙から気が生まれた。気には区別があり……

引用箇所は天文訓の冒頭に当たり、世界の成り立ちを説明する。無から生れたのはこの世界の基となるものであった。

斉俗訓

往古来今、謂之宙、四方上下、謂之宇。

書き下し：往古来今、之を宙と謂ひ、四方上下、之を宇と謂ふ。

通　　釈：古より今に至る時間を宙といい、四方上下の空間を宇と言う。

「宙」・「宇」それぞれの字の意味を示す。宙は時間を表し、宇は空間を表すのである。中国古代の宇宙観を端的に表した例と言えるだろうか。

三番目に『荀子』解蔽篇を見てみたい。

解蔽篇

経緯天地而材官万物、制割大理而宇宙裏矣。

書き下し：天地を経緯して万物を材官し、大理を制割して宇宙を裏む。

通　　釈：天地を秩序だて全てのものを適材適所にあて、根本を治めてこの世を包む。

官吏が法律によって部署につき、職掌に忠実に従って天下を治める助けとなる話で、これも「この世」あるいは「天下国家」という意味。

最後に、やや時代は下るが、秦代の『呂氏春秋』孟春紀の本生を挙げておく。

孟春紀・本生

若此人者、不言而信、不謀而当、不慮而得、精通乎天地、神覆乎宇宙。

書き下し：此くの若き人は、言はずして信、謀らずして当たり、慮らずして得、精、天地に通じ、神、宇宙を覆う。

通　釈：聖人といわれるような人は、何も言わなくとも言葉に信があり、はかりごとをせずとも当を得て、あれこれ考えなくとも必要なものを得ることができ、その気持ちは天地に通じ、心は宇宙を覆うのである。

ここも「この世界」である。

以上の例から読み取れるのは、「宇宙」という言葉は、少なくとも中国の春秋戦国時代には文献に書かれるくらいには浸透していた言葉であり、かつ、その意味は「この世界（空間だけでなく、時間の概念も含む）」であったということである。

このことについて、古代の辞書はどう記しているのだろうか。後漢の許慎によって編纂された最古の部首別辞書である『説文解字』（使用したのは段玉裁が注を付した『説文解字注』（段注本と通称）である）を示すことにする。書き下し・抄釈は筆者によった。（ゴシック体で示した部分が本文、他は注文である）

「宇」**屋邊也**。豳風。八月在宇。陸德明曰。屋四垂爲宇。引韓詩宇、屋霤也。高誘注淮南曰。宇、屋檐也。引伸之凡邊謂之宇。如輪人爲蓋上欲尊而宇欲卑、左傳云在君之宇下、又云失其守宇皆是也。宇者、言其邊。故引伸之義又爲大。文子及三蒼云。上下四方謂之宇。往古來今謂之宙。上下四方者、大之所際也。莊子云。有實而無乎處者、宇也。有長而無本剽者、宙也。有實而無乎處、謂四方上下實有所際。而所際之處不可得到。**从宀。亐聲**。王榘切。五部。**易曰。上棟下宇**。毈辭傳文。虞翻曰。宇謂屋邊也。

書き下し：**屋邊なり**。豳風、「八月は宇に在り。」といふ。陸德明が曰く、「屋は四垂を宇とす。」韓詩を引く「宇、屋霤なり。」と。高誘が注に、淮南の曰く、「宇、屋檐なり。」之を引伸し凡そ辺なるを之れ宇と謂ふ。人の輪するが如く蓋し上尊きを欲し而して宇卑きを欲するとす、左伝に云ふ、「君在すは之れ宇の下」と、又云ふ「其の守宇を失ふ」と、皆な是れなり。宇は、其の辺なるを言ふ。故に之を引伸する義また大なり。文子及び三蒼に云はく、「上下四方之を宇と謂ふ。往古来今之を宙と謂ふ。上

下四方は、大の際まる所なり」と。荘子に云はく、「実有り而して無乎処なる者は宇なり。長有り而して無本剽なる者は宙なり。」と。実り有り而して無乎処は、四方上下は実有るの際まる所なるを謂ふ。而して所際の処は到るを得るべからず。**宀に从ふ。亏聲なり。**王榘の切。五部。**易に曰ふ、「上棟下宇」**と。繫辞伝の文。虞翻に曰ふ、宇は屋辺を謂ふなり。」と。

抄　釈：本義は「屋辺」、つまり屋根の端、すなわち軒である。そこから意味を拡張して、「実有るの際まる所」すなわち四方上下、この世の限りを覆う大屋根を指すようになった。

「宙」**舟輿所極覆也。**（段注）覆者、反也。輿復同。往來也。舟輿所極覆者、謂舟車自此至彼而復還此如循環然。故其字从由。如軸字从由也。訓詁家皆言上下四方曰宇。往古來今曰宙。由今溯古。復由古沿今。此正如舟車自此至彼、復自彼至此皆如循環然。荘周書云。有實而無乎處者宇也。有長而無本剽者宙也。本剽卽本末。荘子說正與上下四方曰宇、往古來今曰宙同。亦謂其大無極、其長如循環也。許言其本義。他書言其引伸之義。其字从宀者、宙不出乎宇也。韋昭曰。天宇所受曰宙。**从宀。**淮南覽冥訓。燕雀以爲鳳皇不能與爭於宇宙之閒。高注。宇、屋簷也。宙、棟梁也。引易上棟下宇。然則宙之本義謂棟。一演之爲舟輿所極復。再演之爲往古來今。則从宀爲天地矣。由聲。直又切。三部。

書き下し：**舟輿の極まりて覆する所なり。**（段注）覆は反なり。復と同じ。往来なり。舟輿の極まりて覆する所なるは、舟車此より彼に至り復た此に還るが如く循環すること然るを謂ふ。故に其の字由に从ふ。軸の字由に从ふが如きなり。訓詁家皆な上下四方を宇と曰ふと言う。往古来今を宙と曰ふ。由は今より古を溯る。復た由は古今に沿ふ。此れ正に舟車此より彼に至るが如く、復た彼より此に至る皆な循環するが如し。荘周が書に云ふ、「実有り而して無乎処なる者は宇なり。長有り而して無本剽なる者は宙なり。本剽即ち本末なり。」と。荘子の説正に上下四方を宇と曰ひ、往古来今を宙と曰ふに同じ。亦た其の大なるは極まり無く、其の長なるは循環するが如きを謂う。其の本義を言ふ許なり。他書に其の引伸の義を言ふ、「其の宇宀に从ふは、宙は宇を出でざるなり。」と。韋昭が曰く、「天の宇を受ける所を宙と曰ふ。」と。**宀に从ふ。**淮南覧冥訓、「燕雀以為（おもへら）く鳳皇と宇宙の間において争う能はず。」高注、「宇は、屋簷なり。宙は、棟梁なり。」易を引くに、「上棟下宇」といふ。然るに則ち宙の本義は棟と謂ふ。一演し之を舟輿の極

まりて復する所となす。再演し之を往古來今となす。則ち宀に从ひて天地となす。由の聲。直又の切。三部。

抄　釈：本義は「棟」、つまり屋根のてっぺんを貫く棟木のこと。そこから意味を拡張して「舟輿の極まりて覆する所」かつ「軸」の字と同系というから、地軸を中心として広がるこの世界（あるいはそれを覆う天蓋）となり、更に拡張されて過去・現在・未来の時間の広がりを指すようになった。

「宇」、「宙」とも、元は建物の屋根の特定部分を指す言葉だったものが、意味を拡張されて「宇」は世界を覆う大屋根、「宙」は時間の広がりを指すようになったということが分かる。

三．日本における「宇宙」の用例 ——上古から中世まで

日本に「宇宙」という言葉がもたらされたのは『千字文』と同時、つまり漢字伝来と同時だというのは、伝説の域を出ない。正確な考察を行うためには、成立年代がはっきりしている他の文献の本文が必要である。

筆者が探し出せた中で最古の文献は、『日本書紀』神代上における例である。以下、引用する。（書き下しは『新日本古典文学全集　日本書紀』（小学館）によった）

故其父母二神、勅素戔嗚尊、汝甚無道、不可以君臨宇宙。固當遠適之於根國矣、遂逐之。

書き下し：故、其の父母二神、素戔嗚尊に勅したまはく、「汝甚だ無道し、以ちて宇宙に君臨たるべからず。固當遠く根の國へ適れ」とのりたまひ、遂に逐ひたまふ。

通　釈：その父母の二柱の神は素戔嗚尊に勅して、「お前はまったくひどい乱暴者だ。それでこの天下に君臨してはならない。必ず遠く根の国に行ってしまえ」と仰せられて、とうとう追放なされた。

続いて、日本最古の漢詩文集である『懐風藻』、その序文に用例が見いだせる。

道格乾坤。功光宇宙。

書き下し：道は乾坤に格り、功は宇宙に光れり。

通　釈：天使の道は天地に至り達し、その功業はあまねく天下にかがやき渡った。

平安時代になると、『本朝文粋』巻一、紀長谷雄「柳化為松賦」が挙げられる。

凡宇宙之内、何奇不生、天地之間、何恠不有

書き下し：凡そ宇宙の内、何れの奇生らざらん、天地の間、何れの恠有らざらんや。

通　釈：およそこの世のうちに、どのような奇妙なことが生じようか。天地の間にどのような怪現象があろうか。

中世では、『太平記』巻一四、「新田足利確執奏状の事」に例を見いだせる。

神武鋒端を揺かし、聖文宇宙を定するなり。

通　釈：神のごとき武徳は軍勢の鋒先を動かし、聖人のごとき文徳は天地を鎮めておられます。

ただし、中世最末期の『日葡辞書』によれば、「宇宙」は「文章語」とされているので、この時代に人口に膾炙していたかどうかは疑問がある。また、中世において「天下・国家」などの意味を表す言葉は、仏教用語を起源とする「世界」の方が一般的であるとの指摘もある。

いずれにせよ、ここまでは「天下・国家・この世」の意味で使われていることには間違いがないだろう。

四．日本における「宇宙」の用例二
――近代科学用語として

明治維新は、日本に非常に大きな衝撃を与えた。西洋基準であるところの「国際社会」に参画して行くにあたって、急速に西洋の文物を輸入し、文明開化と総称される社会の大変革が行われた。本章では、そんな時期の新聞・雑誌・一般書籍などの印刷刊行物から「宇宙」の用例を探し出し、考えていくことにする。

まず筆者は、明治時代以降第二次大戦中までの教科書を集大成した『日本教科書体系　近代編』の二一巻より始まる「理科編」をひもといてみた。「宇宙」という言葉は理化学用語であり、すると学校教育は大きな役割を担っているだろうと考えたからである。すると、確かに小学校の博物学の教科書に、「宇宙」という語が見いだせた。

①『牙氏初学須知』明治八（一八七五）年一一月　田中耕三訳　沢渡太郎訂（原著：“Simples Lectures sur les Sciences, les Arts et l, Industrie”. J.Garrigues, 1872）

巻之一　第三　天體系統

天體系統トハ宇宙ヲ聚成スル天體ノ總稱ニシテ、其真ノ法則ヲ發明セシハ、普魯士ノ星學士歌白尼ナリ、（ルビは筆者）

②『具氏博物学』明治九年（一八七六）年二月　須川賢久訳
田中芳男校閲（原著："A pictorial natural history : embracing a view of the mineral, vegetable, and animal kingdoms, for the use of schools". Samuel. G. Goodrich. 1842 の 1970 増刷本）（注三）

巻一　第一編　有形界　有形界の疆域論
夫レ人ハ萬物中ノ最霊ナル者ナレハ宇宙間ノ萬物ヲ窮察スルコト能クスヘシ然ルニ地所ノ何如ヲ論セス其属目スル所ハ唯纔（わづか）ニ全宇宙ノ小區ノミニ過キス

巻四　第四編　動物界
上條（筆者注：前巻までの内容を指す）既ニ宇宙間ハ地球太陽系恆星等ヲ造構セル物ト其含蓄セル物トヲ包括スルコトヲ論説セリ

この二点の書籍は、教科書でとして使用された本であり、現代的な意味で使用されている。これらによって教育を受けた世代が「宇宙」という言葉を、現代的な意味で自らの著作において使用したということは、想像に難くない。筆者は、「宇宙」という言葉が現代的な意味で使用されはじめた時期を、明治時代初期の学校教育においてだったろうと推測する。

次に、新聞である。本来であれば刊行以来の縮刷版・マイクロフィルム版を丹念に繰っていくべきであろうが、今回は試みにデータベースを用いてみることにした。明治時代からの誌面が、検索可能なデータベースとして公開されているのは、今のところ読売新聞「ヨミダス歴史館」のみである。他紙の整備を望む。

今回は明治大学が導入している「ヨミダス歴史館」で、見出し・本文検索機能を使って記事を抽出し、表示された結果を一件ずつ確認するという手法をとった。その結果、「宇宙空間」という意味で「宇宙」を用いたのは、恐らく明治三二年（一八九九年）十一月八日朝刊の「茶ばなし」（現在で言うところのコラム記事）が最初であろうとの結果を得た。この日のテーマは彗星・流星・流星群である。以下、当該箇所を引用する。（変体がなは通常のものに、漢字は常用漢字体に改めた）

◎流星が宇宙に存在する数は先ず言わば此世界で塵の飛ぶ様なものであって之れが空気に触れると摩擦して光を発する
此の流星が十一月の半ばに最も多く現わるることは小学読本にも載って居る

ここで注目すべきは「小学読本にも載って居る」という語である。ここでの宇宙は、明らかに現在一般的な「宇宙」、つまり大気圏の外の広大な広がりのことを指して使われている。その宇宙空間からやってくる流星の発光原理は、小学校の教科書に載って

いることだというのである。学校教育の影響が見て取れる例であろう。

三番目に、一般書籍のタイトルに「宇宙」が用いられた、比較的早い例を挙げていく。

③三宅雪嶺『宇宙』（政教社、一九〇九年）

宇宙論的な内容のエッセイ集。内容は哲学から天文学、倫理学に及び、深い。ここでの「宇宙」の用いられ方は、現在の「世界」とほぼ同義であることが多いが、多岐にわたっているので一概には言えない。

②アレニウス著、一戸直蔵・小川清彦共訳『宇宙開闢論史』（大蔵書店、一九一二年）

本書の原著はスウェーデンの科学者で、電解質の解離の理論に関する業績によってノーベル化学賞を受賞したスヴァンテ・アレニウス（一八五九年～一九二七年）の『Die Vorstellung vom Weltgebäude im Wandel der Zeiten』（Leipzig Akademische Verlagsgesellschaft, 1908）である。本書は哲学的な、宇宙創造神話に関する考察から論を始め、当時最新の宇宙論についてまでを述べた概説書であり、随所に「宇宙」の語が登場する。原タイトルの「Weltgebäude」（直訳すれば「世界創造」となろうか）を宇宙開闢と訳している。ここでの「宇宙」は、内容からか、世界全体を包括する語として使われているようだが、後半の最新宇宙論の解説ではもちろん現代的な意味での使用が認められる。ただし、筆者は原著を参照することができなかったため、本文においてどのような語が「宇宙」と訳されているのか、詳細は不明である。

③H・G・ウェルズ著、光用穆訳『宇宙戦争』（秋田書院、一九一五年）

原著は『The War of the Worlds』（London : William Heinemann, 1898）であり、SF小説の嚆矢の一冊である。タイトルのWorldを宇宙と訳している。今日ではWorldは一般的に「世界」と訳されるが、ここでは「宇宙」を宛てるのが特徴か。

④大島豊『現代科學の綜合に基く宇宙論』（第一書房、一九三二年）

哲学書。哲学用語で言うところのコスモロジーの訳語として「宇宙論」を宛てている。

こうして俯瞰していくと、哲学用語が目立つ。宇宙論、すなわちコスモロジーは今日哲学の一分野であり、また、かつては博物学に含まれていた天文学の成果も宇宙論に投影されているからであろうか。

今回挙げた例は、当然ながら氷山の一角にすぎない。いずれさらなる考察を行いたいと考えている。

（注三）原書冒頭に掲げられた凡例は

米人「グードリッチ」氏ノ原撰ニシテ學校ノ所用本ニ係レリ彼一千八百七十年即我明治三年庚午非拉特勒飛亞府（筆者注：ルビはママ）ノ刷版ニシテ原名を「ビクトリアル、ナチュラル、ヒストリー」ト曰フ挿畫博物論ト云ヘル義ナリ今之ヲ譯シテ博物學ト題ス

とする。ただし、原著者であるS. G. Goodrich氏は一八六〇年に死去しており、凡例の通りだとするならば、『具氏博物学』の底本は没後に出版されたものである。米国議会図書館のオンラインデータベースによれば、Samuel G. Goodrichの手になる『A pictorial natural history : embracing a view of the mineral, vegetable, and animal kingdoms, for the use of schools』という、まさに学校使用を念頭に置いて書かれた本が一八四二年に出ていることが判る。また同書は英国・米国の様々な都市で出版されたようで、フィラデルフィアにおいてはThomas, Cowperthwait & Co. and Grigg & Elliotによって出されたという奥付がある。「一千八百七十年（中略）ノ刷版」とは、おそらくこの本の増刷であろう。

五．日本における「宇宙」の用例三
——英和・和英辞典における訳語としての扱い

この章では、主に幕末以降の英和辞典をもとに、英語の訳語として「宇宙」が宛てられていった過程を追っていく。着目したのは「space」「universe」「cosmos」という単語である。

まず、現代の英和辞典で、「space」「universe」「cosmos」がどのように訳されているのかを確認する。使用したのは研究社新英和大辞典第六版（研究社、二〇〇二年三月）である。発音記号・用例などは省略した。

space
名詞
1．a（一・二・三次元の）一定の広がり
　b空所、あき場所、スペース（room）《電算》（1字分の）スペース；空白
2．a（特定の目的のための）区域、場所
　b［集合的にも用いて］（列車・飛行機などの予約）座席、席
3．a空間
　b大気圏外；（太陽系を越えた）宇宙、宇宙空間
4．a（時の）間（duration）、時間（period）
　bしばらく（の間）
5．a（ラジオ・テレビの）コマーシャルの時間
　b（雑誌などの）広告欄
6．《口語》（好きなことをしたり、言いたいことを言ったりする）
　自由、不干渉、自主、独立
7．《印刷》スペース

8. 《音楽》《五線譜の）線間
9. 《通信》間隔、スペース
10. a（絵画における）空間
　b（絵画などで）平面上に表された奥行きの感じ
11. 《数学》空間

universe
名詞
1. [the ～] 宇宙（cosmos）、万有、天地万物、森羅万象
2. [the ～]（人間の住む）世界（world）、[集合的] 全人類（all mankind）
3. a [the ～] 天界、天空
　b 銀河系（宇宙）（galaxy）
4. （概念上・現実上で一定の有機的組織を成すとみなされる）分野、領域（sphere, province）
5. 多数、多量

cosmos
名詞
1. a [the ～]（秩序整然とした体系として考えられた）宇宙
　b（整然とした）秩序、調和
2. （観念・経験などの）完全体系、統一的組織
3. コスモス《キク科コスモス属（Cosmos）の植物の総称》

次に、末尾に付した各辞書の調査結果表を上から順番に解説していく。適宜参考にしながら読み進めてほしい。

まずはuniverseだ。これは、一八六九年（明治二）出版の『英華字彙』で既に宇宙の語が宛てられている。『英華字彙』は英中辞典であるWilliamsの『英華韻府歴階』（一八四四年）の翻訳なので、universe＝宇宙というのは、中国から輸入された語彙であると考えてほぼ間違いないだろう。ただし、『英華字彙』における「宇宙」は、現代的な意味での宇宙ではないようだ。「十方」と合わせて掲載されているので、今で言う「世界・この世」と近い。これは『荘子』『淮南子』から変化していない。他書でも「あらゆるもの・天地万物」などとされており、こちらも現在の「宇宙」からはやや隔たった意味だ。ただし、universeの本来の意味を考えると、『英華字彙』他は適切な翻訳であるといえよう。

今回調査対象とした辞書で『英華字彙』よりも古いのは一八一四年（文化一一）の『諳厄利亜語林大成』のみだが、これにuniverseは掲載されていない。

次に、spaceだ。結論から言うと、「space」をそれのみで「宇宙」と訳す例は、第二次世界大戦後まで見られなかった。戦前の英和辞書では一九三六年（昭和一一）の『新英和大辞典』に見られるように「celestial space」という成語に「宇宙」の訳が与えられ、「space」には、空間・隙間という訳が与えられている。現代日本では宇宙＝宇宙空間＝spaceという図式が成り立っているが、結果を見ると元々「celestial space」だったものが、宇宙空間を表

す特定の文脈において省略されて「space」となり、それが一般化したと考えられなくもない。

最後にcosmosだ。これは明治初年の辞典には収録されていない言葉で、管見の限り一八八六年（明治一九）の『和英語林集成（3版丸善版）』が初出のようだ。ここでは「世界」の語が宛てられている。その三年後、一八九九年の『明治英和辞典』では既に「宇宙」が宛てられている。

辞典というのは、語の意味を解説する書物である。よって、その性質上、ある語の新しい使われ方が出現した場合は、そこからやや遅れて本文に反映されることになる。universeやcoumos、あるいは前章で触れたようにworldの訳語としての「宇宙」が比較的早く辞書に収録されたのに対し、spaceが「宇宙」という言葉で辞書に収められたのはかなり後のことである。そこには、世界における宇宙開発の進展や、天文学の高度な発達が寄与していたのかもしれないと考える。

六．おわりに

今回の調査の結果を確認しつつ簡潔にまとめる。

「宇宙」という言葉は、古代中国に起源を持つ。それが日本に移入されたのは、奈良時代あるいはそれより前のことであった。意味においては、中国では、「宇」、「宙」とも、元は建物の屋根の特定部分を指す言葉だったものが、意味を拡張されて「宇」は世界を覆う大屋根、「宙」は時間の広がりを指すようになった。その状態で日本に輸入され、「天下・国家・この世界」という意味で上古から近世まで使われた。

日本において意味の変化が現れたのは、調査の限りでは、明治維新後の西洋近代科学の導入期であったと想像される。西洋の博物学書を翻訳した、学制初期の日本の教科書において「宇宙」の語が使用されはじめるが、その時点で従来の意味に付け加えて、現代に連なる、「星間空間・大気圏外の空間」をも意味するようになった。やがて、学校教育を受けた世代が世の中に出て行くに従って、「宇宙」の語は一般化し、一般書や新聞などでも使用されることとなった。

辞典においては、universe・cosmos・worldに比較的早くに「宇宙」の語が宛てられていた（注四）のに対し、今日「宇宙」に対応する英単語として真っ先に思い浮かべられるspaceを単独で「宇宙」と訳す例は、第二次世界大戦後にならないと登場しない。

明治維新によって本格化した西洋文明社会との接触は、様々な変革を日本、日本文化、日本人そのものにもたらした。「宇宙」という言葉もまた、その例に漏れるものではないと、今回の調査を通じて強く感じた。

もとより本調査は完全を期したとは言いがたい。解釈の間違いや資料取扱いの問題などがあるかもしれない。読者諸賢のご叱正とご教示を乞う次第である。

（注四）worldは、『諳厄利亜語林大成』の段階で宇宙の訳語が宛てられている。また、明治二十二（一八八九）年出版の尺振八『明治英和辞典』（六合館）においても

world（名）世界。世。界。人間界○人事。世事○万有。宇宙○人類○斯世。現世○大数。億兆。

の記述が確認できる。

参考文献

- 日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典第二版』（二〇〇一年二月、小学館）
- 竹林滋等編『研究社　新英和大辞典　第六版』（研究社、二〇〇二年三月）
- 新村出『広辞苑』第六版（二〇〇八年一月、岩波書店）
- 阿部吉雄・山本敏夫・市川安司・遠藤哲夫『老子・荘子　上』新釈漢文大系7（一九六六年十一月、明治書院）
- 市川安司・遠藤哲夫『荘子　下』新釈漢文大系8（一九六七年三月、明治書院）
- 楠山春樹『淮南子　上』新釈漢文大系54（一九七九年八月、明治書院）
- 小柳司気太『老子・列子・荘子』国訳漢文大成　経子史部七（一九一八年九月、国民文庫刊行会）
- 笹川臨風『荀子・墨子』国訳漢文大成　経子史部八（一九一八年七月、国民文庫刊行会）
- 後藤朝太郎『淮南子』国訳漢文大成　経子史部一一（一九一九年四月、国民文庫刊行会）藤田豊八『呂氏春秋』国訳漢文大成　経子史部二〇（一九五五年九月、東洋文化協会、復刻版）
- 許愼著、段玉裁注『四部善本新刊　段句套印本説文解字注／許學叢書本段氏説文注訂』（一九八〇年三月、漢京文化事業有限公司）
- 長谷川端校注『太平記　新編日本古典文学全集五五』（一九九六年三月、小学館）
- 身延山久遠寺『身延山久遠寺蔵　重要文化財　本朝文粹』（一九八〇年九月、身延山久遠寺）
- 貴重図書複製会『日本書紀』（一九四一年一二月、貴重図書複製会）
- 本木正栄『諳厄利亜語林大成』（一九七六年、雄松堂による複製）
- 斯維爾士維廉士『英華字彙』近代日本英学資料1（一九九五年三月、ゆまに書房：松荘館一八六九年刊の復刻）
- P. A. Nuttall著　棚橋一郎訳『英和雙解字典』近代日本英学資料2（一九九五年三月、ゆまに書房：丸善一八八六年刊の復刻）
- 柴田昌吉、子安峻同著、天野爲之訂正、鈴木重陽増補『附音圖解英和字彙　第二版』（一八八六年七月、文學社）
- J.C. Hepburn『A Japanese and English dictionary, with an

English and Japanese index　和英語林集成』（一八六七年、American Presbyterian Mission Press）
・J・C・ヘボン著、飛田良文・李漢燮編『和英語林集成　初版・再版・三版対照総索引』（二〇〇〇年一月～二〇〇一年七月、港の人）
・Sir Ernest M. Satow、Ishibashi Masakata 共編『An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language』（一八七六年、三省堂）
・岡倉由三郎『新英和大辭典』（一九三六年三月、研究社）
・尺振八『明治英和字典』近代日本英学資料5（一九九五年三月、ゆまに書房：六合館一八八九年刊の復刻）
・島田胤則、頴川泰清『和英通語捷径』（一八七二年、蒲池從三）
・海後宗臣等編『日本教科書体系　近代編　第二十一巻　理科（一）』（一九六五年七月、講談社）
・三宅雪嶺『宇宙』（一九〇九年一月、政教社）
・アレニウス著、一戸直蔵・小川清彦共訳『宇宙開闢論史』（一九一二年一〇月、大蔵書店）
・H・G・ウェルズ著、光用穆訳『宇宙戦争』（一九一五年一月、秋田書院）
・大島豊『現代科學の綜合に基く宇宙論』（一九三二年八月、第一書房）

データベース等
・ヨミダス歴史館（読売新聞データベース）
・近代デジタルライブラリー（http://kindai.ndl.go.jp/index.html）
・アメリカ議会図書館（Library of congress:http://www.loc.gov/index.html）
・中国基本古籍庫
・文淵閣四庫全書データベース

資料（近現代英和辞書の用例調査）

見出し語	解説文	出典	著者	成立・刊行年	備考
Universe	宇宙、十方	英華字彙	斯維爾士維廉士 著 衛三畏 鑒定 柳沢信大 校正訓点	1869	Williams『英華韻府歴階』（1844年）の日本語訳
	the general system of things. 宇宙、乾坤、六合、天地、万物	英和双解字典	P.A.Nuttall 原著 棚橋一郎訳	1885	
	宇宙、天地万物	附音図解英和字彙	柴田昌吉、子安峻同著 天野爲之訂正 鈴木重陽増補	1886	
	Arayuru mono. Tenchi ban-butsu.	和漢語林集成	ヘボン	1889	
space	間隙、スキ	諳厄利亜語林大成	本木庄左衛門（正栄）	1814	書名：あんげりあごりんたいせい
	Aida; ma; hima; kuchiu; koku; chiu.	和英語林集成（初版）	ヘボン	1867	
	Aida; ma; hima; kuchiu; koku; chiu; ai.	和英語林集成（２版）	ヘボン	1872	
	Aida; ma; hima; kuchiu; koku; chiu; ai; kukan.	和英語林集成（３版丸善版）	ヘボン	1886	
	虚空	英華字彙	斯維爾士維廉士 著 衛三畏 鑒定 柳沢信大 校正訓点	1869	
	(room) basho; ba-seki; (interval) aida; (of time) hima; avaiable—ma; enpty—o-zora; taiku(c)"	AN ENGLISH-JAPANESE DICTIONALY OF The Spoken Language"	E.M. Satow Ishibashi Masakata	1876	
	(celestial ～　宇宙）	新英和大辞典	岡倉由三郎	1936	
cosmos	Sekai	和英語林集成（３版丸善版）	ヘボン	1886	
	宇宙、堪輿〇宇宙ノ理	明治英和辞典	尺振八	1889	cosmic を「全世界ノ。宇宙万物ノ〇太陽系ノ」と訳す 「堪輿（かんよ）」は天地の意。
world	世界、宇宙	諳厄利亜語林大成	本木庄左衛門（正栄）	1814	書名：あんげりあごりんたいせい
	世界。世。界。人間界〇人事。世事〇万有。宇宙〇人類〇斯世。現世〇大数。億兆。	明治英和辞典	尺振八	1889	
宇宙	World	和英通語捷径	島田胤則、頴川泰清纂輯	1872	
	All under the canopy, the world, universe"	和英語林集成（２版）	ヘボン	1872	

（かねきとしのり、明治大学大学院博士後期課程）